

# 「皇道に醇化融合したる儒教」としての 「皇道儒学（教）」言説 ——大東文化学院と朝鮮経学院との連環——

姜 海 守

「孔子は単なる尚古主義者にあらず、又軽薄なる進歩主義者にあらず、大道に則り、中正に率ひ、文武岐れず、知仁勇を兼ね、尊王愛国、最も日本精神に一致するものを持つてゐる。其の徳教は最も良く我が皇道に醇化し、長く皇道を扶翼してゐる」（高田真治「大東亜戦争と斯文」『斯文』第24編第10号、1942年10月、17頁）

「我が斯文会は、皇道に醇化せる儒教を以て教育に関する勅語の趣旨を宣揚し奉る、簡単にいへば水戸学といつてもよいのでござる」（宇野哲人「時局に対する斯文会の使命」『斯文』第24編第6号、斯文会、1942年6月、14頁）

## 一、韓国における「皇道儒学（教）」への思い出

本稿は、韓国における学問的市民権を持つ「皇道儒学（教）」という言説を、帝国日本と植民地朝鮮における思想的連環をめぐり考察するものである。日本において、「皇道仏教」についての研究は一定の成果を上げてきているが、「皇道儒教・皇道儒学」をめぐってはその用語すら俎上に上ることはなく、主に韓国からの留学生による朝鮮「経学院」<sup>1)</sup>関連の研究のほか、近代史・宗教史分野の日韓研究者によって断片的に取り上げられてきたにすぎない。皇道儒教・皇道儒学に関連していえば、1924年1月28日に開校した「大東文化学院」の設立の趣旨である「皇道及国体に醇化せる儒教」をめぐって、主に大東文化大学関係者たちを中心に研究が行われてきた。ただし、この成果は、必ずしも、1930年代における「皇道及国体に醇化せる儒教」としての「日本儒教」、ないし「皇道儒学（教）」研究にまでその射程が及んでいるものとは言い難い。とりわけ、大東文化学院の卒業生として、卒業後に経学院・「明倫学院」（専門学校、以下、明倫学院と表記）<sup>2)</sup>および「朝鮮儒道連合会」（1939年10月16日に結成）を中心に植民地朝鮮における「皇道儒学」の確立に際し中枢的な役割を果たした、<sup>アン・インシク</sup>安寅植（1891-1969）と<sup>ジュ・ビョンゴン</sup>朱柄乾（1890-?）<sup>3)</sup>の「皇道儒学」論についての研究は日本において皆無である。のみならず、大東文化学院を媒介とした、日本の知識人と経学院・明倫学院関係者の人的・思想的ネットワークについての研究も、同様の状態にある。

これまでの韓国における「皇道儒学」研究は、主に京城帝国大学法文学部朝鮮語文学科主任教授であった高橋亨（1878-1967）の「王道儒道より皇道儒道へ」（1939年12月）を、朝鮮総督府と朝鮮儒道連合会との関係上、議論の出発点にしてきた。だが、本研究で論じるよう

に、「皇道及国体に醇化せる」「日本儒教」としての、植民地朝鮮における「皇道儒学」言説の定着とその拡大は、朝鮮総督府の政策の実施を背景としつつも、安寅植や朱柄乾らを中心とした経学院・明倫学院と朝鮮儒道連合会との連環内でなされてきた。すなわち、内地日本の「皇道に醇化融合したる儒教」としての「日本儒教」言説の語り手たちとの交流を通し、明倫学院および朝鮮儒道連合会において、植民地朝鮮における「皇道儒学」を広めた安寅植らの活動を考慮すれば、東京帝国大学文科大学漢文科出身の高橋の「皇道儒学」の語り手としての位相は却って傍系的な存在といえよう。もっとも高橋の上記論考は、当時日本内地の「日本の儒教」の起源論・「易姓革命」論・山鹿素行論を反映しているものの、必ずしも自説を展開したとはいえない。朝鮮総督府側の中心的な御用学者として、経学院・朝鮮儒道連合会儒者たちに対する政策に関わった彼の影響力は一定部分認めるとしても、高橋は1939年4月4日に京城帝国大学を依願免官（1940年11月18日に名誉教授）した後、1941年より山口県萩市で隠遁していた。その後、高橋は京城に帰還し、太平洋戦争末期の1944年10月から経学院大提学兼朝鮮明倫錬成所（明倫専門学校から変更）所長に着任（かつ朝鮮儒道連合会副会長）した。この間、「皇道儒学」について開陳した高橋の論考は見当たらない。

本論文では、このように、主に高橋亨の「皇道儒道」論を考察の出発点としてきた韓国における「皇道儒学」研究とは異なる角度から、「皇道に醇化融合したる儒教」・「皇道及国体に醇化せる儒教」というナラティブを手掛かりにして、大東文化学院と経学院・明倫学院とが「共同」で語り出した「皇道儒学（教）」の言説的営みについて考えていく。その際、朝鮮儒者側から「皇道儒学」を語る根拠は如何なところにあつたかも合わせて問うていく。これは、大東文化学院側が語り出した「日本儒教」言説が植民地朝鮮において如何なる意味を持っていたのかを問うことでもある。そのため、大東文化学院卒業生の安寅植および朱柄乾の「皇道儒学」・「日本儒教」言説を検討する。最後に、解放後韓国および戦後日本で再び喚起された「皇道儒学（教）」言説の思想的な営みについて述べることにする。

## 二、大東文化学院と経学院・明倫学院

「皇道儒学（教）」言説は国家総動員が実施された1938年5月（1938年5月5日に国家総動員法施行）以降の植民地朝鮮にも政策的に影響を及ぼすが、「皇道儒学（教）」言説の思想的な営みそれ自体は1920年代の日本内地ですでに現れていた。「皇道に醇化融合したる儒教」というナラティブがそれである。これは東京の大東文化学院を拠点に語られたものであり、1934年1月27日に大東文化学院内で発足した「日本儒教宣揚会」が編纂した『日本之儒教』（1934年6月）において、「皇道及国体に醇化せる儒教」としての「日本儒教」という言説も、日本思想史上において初めて登場する。この時期は、帝国日本が1933年3月27日に国際連盟からの脱退を宣言し、国際社会から「孤立日本」へと進んでいた時期にあたる。

1921年3月18日に提出された木下成太郎（1865-1942）他10人の衆議院議員による「漢学振興ニ関スル建議案」は、1923年3月3日の「漢学振興ニ関スル建議案」第3案を経て再

度提出された後、大東文化協会および大東文化学院の設立に帰着する。「建議案」第1案の内容には、「漢学ハ古来我カ邦ノ文化ニ貢献シ国民思想ノ涵養ニ資益セシ所大ナルモノアリ。而シテ今後亦之ニ待ツ所少シトセズ之ガ振興ノ途ヲ講ズルハ刻下ノ急務ナリトス。依テ政府ハ之ニ関シ適當ノ方法ヲ施サレムコトヲ望ム」<sup>4)</sup>とある。衆議院本会議での「建議案」可決、そして貴族院予算委員会総会での予算案承認を経て、1923年2月11日に設立された大東文化協会（同年9月20日に財団法人へ転換）の「目的及事業」要領第一項は「我皇道ニ遵ヒ国体ニ醇化セル儒教ニ拠リ国民道義ノ扶植ヲ図ルコト」<sup>5)</sup>である。この「目的及事業」をめぐっては、後に協会の副会頭となる江木千之(1853-1932)の以下の回顧文が参考になる。

世界の大戦争以来、欧羅巴の燦然たる文明は、一朝にして破壊せられ、思想界は紛乱を極め、今後は新機軸の上に、文化を組立てなくてはならぬことになったのである。此時に方り、我が日本国は、固有の文化を維持振作し、国体の精華を益々發揮するのみならず、之を東洋一般に及ぼし、東洋の文化を上進せしめ、以て世界の文化に貢献しなくてはならぬと考へたのである。而して此の事業の目的を達するには、日本国が指導の位置に立つも、唯だ日本人のみの力を持つものではない<sup>6)</sup>。

日本近現代政治史研究者の伊藤隆(1932-)は「漢学振興に関する決議→大東文化協会の結成という流れは、第一次大戦中および後の新しい状況に対する一つの対応の型の形成過程」<sup>7)</sup>と指摘しているが、大東文化協会の結成は第一次大戦後の＜欧羅巴の文明＞に対する保守反動の動きとして現れた。協会の「目的及事業」を引き継ぐ大東文化学院の「学則」第一章総則第一条も「本学院ハ本邦固有ノ皇道及国体ニ醇化セル儒教ヲ主旨トシテ東洋文化ニ関スル教育ヲ施スコトヲ以テ目的トス」<sup>8)</sup>とある。ところで、1929年10月4日に朝鮮総督府学務局長に就任(1931年6月27日まで)した武部欽一(1881-1955)の「演示 経学の振興と明倫学院の使命」(『経学院雑誌』第34号、1932年2月、漢字まじりハングル文)における、斎藤実朝鮮総督の訓示に表れた「明倫学院の使命」を強調する文章には、「漢学振興に関する」「貴族院予算委員会」での「本邦ノ文化事業奨励ニ関スル希望決議」、すなわち「我国現下ノ状況ヲ顧ミルニ東洋文化ノ淵源ニシテ夙に我國体ニ醇化シ 祖宗列聖ノ貴訓タル 皇道ヲ輔翼セル漢学即チ儒教ハ維新以来欧米ノ文物ヲ移入スルノ火急ナリシカ為メ自然厭卷遺棄ノ傾向ヲ生セシメシノミナラス不幸ニシテ近年老儒碩学ノ応ニ国民ニ対シテ指導ノ任ニ当ルヘキモノ次第第二凋落シテ跡ヲ当世ニ絶タントス夫レ然リ今ニ及ンテ大ニ善後策ヲ講スルニアラスンハ何ヲ以テカ国民ヲシテ前述ノ大業ヲ成就スルノ途ニ就カシムルコトヲ得ンヤ」<sup>9)</sup>(傍点は引用者)という文章がそのまま引用されている。

### 三、「皇道及国体に醇化せる儒教」としての「日本儒教」

前章の冒頭で述べたように、貴族院議員であり、大東文化学院の第7代（1932年1月30日～1938年2月9日）総長でもあった加藤政之助（1854-1941）の「提唱創設」により、1934年1月27日に東京丸の内の東京会館において、「日本儒教宣揚会発会式並に先哲祭」が行われた<sup>10)</sup>。「発会式式辞」にて加藤は、「皇道国体ニ醇化セル儒教ヲ宣揚セシメントナラバ先哲ヲ祭リテ其敬虔心ヲ発動スルヨリ良キハナイデアル、是レ我々大東文化学院ノ学徒ガ茲ニ教職員連結シテ儒教宣揚会ヲ組織シ東京市ヲ手始メニ全国的ニ儒教宣揚講演会ヲ開キ我国固有ノ精神文化ヲ普及シ物質文明ニ付随セル弊害ヲ一掃センコトヲ期シ、本日ヲ以テ此所ニ儒学先哲祭ヲ挙行致ス次第デアリマス」<sup>11)</sup>と述べている。また、この発会式では、加藤総長のこの式辞とともに、当時文部大臣であった鳩山一郎（1883-1959）が会場で祝辞を述べている。その他、内閣総理大臣として第2代朝鮮総督（1919年8月13日～1927年12月10日）を歴任した斎藤実（1858-1936）をはじめ、貴族院議長の近衛文麿および衆議院議長の秋田清（1881-1944）、そして満州国立法院長の趙欣伯（1890-1951）などの政界実力者たちの祝辞が届けられた。また、駐日本満州国特命全権公使であった丁士源（1879-1945）の「日本儒教宣揚会紀念冊題辞」、趙欣伯の「論日満両国昌明儒教之道並祝儒教宣揚会之発展」、そして朝鮮経学院儒者として大東文化学院卒業生の朱柄乾の「祝辞」など、漢文体の祝辞もみえる。当日、朝鮮側からはまた、同じく大東文化学院卒業生で経学院儒者の安寅植の「貴会ノ将来ヲ祈ル」という祝電も届いた。外観として、「日本儒教宣揚会」発会式は、日本と満州国、そして朝鮮経学院の人士たちが関わって举行された、「皇道及び国体に醇化された儒教」としての「日本儒教」を宣布する行事となったのである。1933年に「朝鮮儒教会（明倫学院）」を創設し、以後、朝鮮儒道連合会にも加入した安教煥（安淳煥から改名、1871-1942。1935年2月8日に『日月時報』を創刊）の場合には、「加藤総長に呈す」（1935年6月8日）にて、「朝鮮経学院、係是類似官庁、既無与民合作之例、自是朝鮮由習也、但朝鮮儒教会、純出於民力、既有三万余之教徒、批若適宜誘導其勢、有不可思量之潜力」<sup>12)</sup>とのごとく、朝鮮儒者の潜在力を主張している。

なお、「日本儒教宣揚会」は、上記の行事の後の1934年2月3日、明治神宮外苑にある日本青年館で初めての講演会を行った。そしてその後、4月28日まで全国で講演会が開催されることになる。これと関連して、『日本之儒教』の編者「例言」には、「大東文化学院は、斯道の闡明を以て任と為し、学徒を教養すること十余年、加藤同学院総長、更に之を社会に宣布するの必要を感じ、茲に日本儒教宣揚会を創立して、或は講演会を開き、或は儒教普及講座を設け、以て国家重大時に対する奉公の誠を致されんとす」と記されている。1936年1月に刊行された『日本之儒教』第2輯には、その後に開催される浦和市、東京九段下軍人会館、京都市などでの講演会、そして1935年10月23日の東京中央放送局でラジオ放送された加藤総長の「日本精神の作興」などが載せられている。

このように、加藤政之助総長と大東文化学院の関係者たちは、帝国日本の国際連盟脱退に

よる「孤立日本」の「非常時」から脱けだすための「日本精神」論が広く人口に膾炙される中で、「皇道国体に醇化せる」「日本儒教」を新たに「闡明」<sup>13)</sup>し「宣揚」するための一連の活動を重ねたのである。

ところで、『日本之儒教』に掲載された岩澤巖（生没年未詳）「皇道を扶翼する儒教」には、「皇道」と「儒教」とを合わせた造語である「皇道儒教」という語が初めて登場する。岩澤は、「皇道と王道」を「同一義的のもの」にすることを拒否しながら、「王道主義は勿論「儒」及び「儒教」の概念を形成する以前にあつた。併し乍らそれ等を抱擁して自家葉籠中に自らの主張を加味して一大思想を構成したものは孔夫子其人である。故に儒教の特質は（一）六経、（二）実践道徳、（三）宗師孔子に在る。此の三者に於て究極の目的を發見・実現・拡充する所に儒教即王道の主義と主張がある。王道は実に儒教精神の核心にして又東洋道徳の本流と言つてもよいであらう」と述べる。「皇道」とは「天命民意主義」に基づいた「受命の君」による「王道」とは異なり、「神君一体」の「天孫であり、現神」<sup>アキツミカミ</sup>の「君徳の如何に依りて君位の左右され得ざる君」による統治を意味すると主張するのである。岩澤はまた、「皇道儒教への主張は実に此の一点に帰する。一定の土地・人民・主権なき世界主義に対する其の認識・批判こそ皇統万世に動きなき日東国民に与へられたる唯一の誇りであり、宣揚でなければならない」という<sup>14)</sup>。その他、『日本之儒教』に「先哲祭に列して」を寄せた東洋史学者の橋本増吉(1880-1956)は、「我が先哲諸儒は儒教の他の一面たる易姓革命是認の思想を無視して、特にその家族主義的の方面を強調し、以て我が皇道の扶翼に努め、こゝに所謂日本儒教を完成した。かくて支那の儒教が王道を以てその理想とするに対して、日本儒教が皇道を以てその理想とする、両者の根本的相違を来したのであつた」と述べながら、日本の「大家族主義の国家観念」に基づいて「易姓革命是認の思想」を拒否する「皇道」としての「日本儒教」を論じている<sup>15)</sup>。

一方、「皇道及国体に醇化せる儒教」としての「日本儒教の起源」を裏づけるナラティブとして語られたのが「博士王仁」の存在である。東洋史学者の中山久四郎(1874-1961)は、『日本之儒教』に寄稿した「博士王仁の功績」において、王仁は「阿直岐と、もに、本朝の儒祖儒宗と言ふべき」という<sup>16)</sup>。中山は、「博士王仁の功績に対しても、亦之を顕揚報謝するは当然の事である。是れ一は過去の偉人先哲に対する礼義たると、もに、又一は現代の教化振作に裨益し、兼ねて内鮮融和の為に有益なる事である」<sup>17)</sup>とも述べている。また、加藤政之助総長はこの「本朝の儒祖儒宗」としての「博士王仁」とともに伝わった「支那」の「孔孟の道」が「皇道及国体に醇化せる儒教」として成立できた理由を、「此の儒教は、我国の皇道、国体に合致する処が多かつたので、此の儒教は久しからずして皇道、国体に醇化し、日本道徳の要素となり了したのである」<sup>18)</sup>と主張している。「日本儒教」の＜成立の言説＞もしくは「始まりの語り」<sup>19)</sup>は、こうした近代日本における「博士王仁」言説とともに語られてきたものであった。



#### 四、「儒道の覚醒」・「儒道振興」と「皇道儒学」論

安寅植は、朝鮮儒者の側からの「皇道儒学」論のもっとも中心的な語り手であった。こうした安の役割は、彼の思想的性向と合わせて、大東文化学院で修学した朝鮮儒道連合会内の数少ない人物であることと関わりがあるのであろう。次章で考察する朱柄乾とともに、卒業後にも、大東文化学院関係者たちと「連帯」し、もっとも中心的な「皇道儒学」の語り手としての役割を果たした。大東文化学院の在学中にも、安は東洋文化学会発行の『東洋文化』第45号（1928年2月）・第47号（1928年4月）に「中等教育漢文問題について」・「中等教育漢文問題について（二）」を、第49号（1928年6月）には「朝鮮に於ける儒道振興の必要」を発表している。そしてその卒業後には、「朝鮮儒教会復日講演」（『日月時報』第2号、1935年）、「精神指導に対して」（『経学院雑誌』第39号、1935年10月）。初出は『毎日新報』、1935年7月14日付）を発表した。「朝鮮儒道連合会」結成以降には、日本語の「東亜ノ建設ト儒道ノ精神」（『経学院雑誌』第45号、1940年12月）、「経学の利用と儒林の覚醒」（『春秋』第2巻3号、ハングル文、1941年4月）をそれぞれ発表している。これらの論考は、これから考察する「皇道儒学」（『儒道』第1号、1942年5月）・「皇道儒学（二）」（『儒道』第2号、1942年10月）および「皇道儒学の本領」（『朝鮮』第347号、1944年4月）に先だつ論考として注目に値する。

いずれにせよ、第一章で触れた高橋亨の「王道儒道より皇道儒道へ」以外に、「皇道儒学（教・道）」という語を自らの論考の表題にして発表した経学院儒者は安のみである。「皇道儒学（二）」の最後の頁には「次号ニ続ク」という語句があることから安は次の論考を次号（？）に掲載することも予定していたことが推測される。だが実際に続きは掲載されなかった。ただし、時間的な隔たりを経て、上記の「皇道儒学の本領」が朝鮮総督府機関誌の『朝鮮』で発表されている。このように、1943年3月に「経学院を中心として全鮮儒林の連絡統一ある国体を組織し、皇道精神に基く皇道儒学を確立すること」<sup>20)</sup>を朝鮮儒道連合会結成の「三大綱領」の一つにした後、「従来儒道と通称せるを爾今皇道儒学と称するやう指導すること」<sup>21)</sup>という1941年3月の朝鮮総督府の通牒に合わせるかのように、安は『儒道』創刊号と第2号において自らの「皇道儒学」論を語りだしていくのである。これは「朝鮮儒道連合会」教育部長の肩書をもっていた安が、少なくとも朝鮮人儒者側から、この団体が邁進していくべき理論的志向を先導していくことを意味している。

まず、「皇道儒学」の内容をみると、第一に、「皇道」と「日本国体の万邦無比」との関係を中心に、「教育勅語」に表れた「道義立国の日本精神」およびこれに基づいた「国民」の「忠孝実践」について論じられている<sup>22)</sup>。第二に、「皇道と儒道」とが一体化された、日本における孔子の「春秋の大義」ないし「大義名分に重きを置いた尊皇思想」の伝統についての叙述がみえる。すなわち、北畠親房(1293-1354)の『神皇正統記』（1339年に完成、1343年に改訂）、第2代水戸藩主徳川光圀（義公、1628-1701）の彰考館設置と『大日本史』の編纂事業（1657年に徳川光圀の命令によって着手され、1906年に完成。総39巻）、第9代水戸

藩主徳川齊昭（烈公、1800-1860）の藩校弘道館（1841年7月に完成）設立などが、日本において「皇道と儒道をよく融合したる学派を作り、尊皇思想の源泉をなした」（傍点は引用者）と、安は説明する。また、「皇道と儒道との融合醇化したるにより最上至善の道德を完成せられた」（傍点は引用者）とも、安は述べるのである<sup>23)</sup>。この引用文からは、「皇道に醇化融合したる儒教」としての「日本儒教」もしくは「皇道儒教」といったナラティブが想起されるのはいうまでもない。

次に、「皇道儒学（二）」において、安はまず、「皇道儒学の定義」との関わりにて、「湯武放伐の問題」を取り上げる。安は、「皇道儒学」的思考において「放伐革命の如きは国体擁護上断然之を排斥せねばならない」と、述べている。「孔子の春秋大義並に、「君は君たり臣は臣たり」との理想政治は、日本を置いては更に求めることが出来ない。故に皇道儒学の特質としては、先づ放伐思想の是正を明確にせねばならぬ」と論じるのである<sup>24)</sup>。二点目に、安は「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ…」との教育勅語の文章と、「人の人たる所以は忠孝を本と為す（人之所以為人、忠孝為本）」との吉田松陰（1830-1859）の「士規七則 第一節」を例に、「皇道精神」上の忠孝の重要性について強調する。「忠孝一致」、すなわち「元来忠孝は一にして二に非らず、忠即ち孝孝即ち忠、此の二者固より一貫したる性質を有」しているとする<sup>25)</sup>。こうした言及と関連して、安は「水戸学の真髓」としての、水戸藩士の藤田東湖（1806-1855）が1847年に2巻本として完成した『弘道館記述義』（以下、『述義』と略記）の一節を取り上げる。『述義』は、1838年に徳川齊昭の名で宣布した弘道館の教育方針を、藤田が一巻本として起草した『弘道館記』に自ら注釈した書物である。安は『弘道館記』の「忠孝無二」という語をめぐる『述義』における長い注釈を紹介しながら、「皇道儒学の特質として忠孝一本の真理を特に宣揚致度きものである」という<sup>26)</sup>。安のこうした「皇道儒学」論の展開に見て取れる日本近世・幕末期の「皇学」類をめぐる知識は、次章で述べる朱柄乾とともに、経学院儒者・朝鮮儒道連合会」内では例外的なものであった。このことはいうまでもなく、安が大東文化学院で学んだことと関係があるろう。大東文化学院の設立当時の「大東文化学院学則」第7条「学科課程」には、本科第1学年正科目の「皇学」分野に『弘道館記述義』も含まれていた<sup>27)</sup>。安は高等科に通ったが、「皇学」言説が形成される過程でもちだされた『弘道館記述義』などの議論をめぐる学院内の動向に接していたはずである。

安が大東文化学院に在学していた1928年には、大東文化学院教授を歴任した加藤虎之亮<sup>28)</sup>（1879-1958）の『弘道館記述義小解』（以下、『小解』と略記）も公刊された。1943年10月21日に執筆された「再版自序」において、加藤は、「大正十二年大東文化学院ノ創立セラルルヤ、予本科生ノタメニスノ書ヲ講ズ。爾来同院必課ノ書トナル。（中略）今や国家ハ曠古ノ危局ニ際会セリ、乱ヲ撥メテ正ニ反スハ極メテ難事ナリ。而シテ戦後ノ経営宜ヲ得、稜威ヲ八紘ニ光被セシムルハ更ニ難事ナリ。苟クモ館記述義ヲ誦読シ其ノ精神ヲ体得シテ事ニ当ラバ、必ズヤ有終ノ美ヲ済スヲ得ン。小解ノ如キモ参ニ資スルヲ得バ望外ノ幸ナリ」<sup>29)</sup>と

記している。初版の1928年10月執筆の「自序」では、「皇道ノ淵源ニ泝洄シテ、国体ノ精華ヲ体得シ、文武ヲ励ミ、忠孝ヲ奨メ、以テ臣子ノ分ヲ尽スハ、奉賀ノ第一義タリ。斯ノ義ヲ明カニセルモノ、館記述義ノ如キハ多ク類例ヲ見ザルナリ」と、「国体ノ精華ヲ体得シ」「臣子ノ分ヲ尽」した『述義』の持つ価値について述べている。「東洋文化学会」会長の平沼騏一郎(1867-1952)は『弘道館記述義小解』に「序」(1943年10月執筆)を付し、「…之をして我が国体に醇化せしめ、融合渾涵、遂に皇道儒教ニ致なきに至らしめたる、幾多碩学の功績も、亦決して没すべからず。水戸学派の如き、特に然りと為す。(中略)国家今や曠古の聖戦に従事し、興亜の大業を建設せんとす。是の時に当りて、最も急を要するものは皇道の誕敷にして、一日も忽にすべからざるものは、戦時及び戦後に於ける思想の善導なり。加藤君此に観る所あり、率先是の著を公にして読者に嘉恵し、以て世道人心の扶植に資す、時宜を得たりと謂つべし」(傍点は引用者)<sup>30)</sup>と、『小解』を高く評価している。加藤は、この自著の『小解』において、「館記述義の特長」をめぐり、「大忠大孝の一致を説いた所は矢張り自家独特の識見を示している。(中略)要するに述義の一書は彼の該博彼の卓見彼の文章を全知せしむるもので且つ所謂水戸学の縮図である。水戸学の神髄を知るには此の書を措いて他に索むることは出来ぬ。ひとり水戸学を了解せしむるのみならず我が国民道德の淵源帰趣を知らんと欲するものにも關鍵の役目を為すものである」<sup>31)</sup>と、「水戸学の縮図」としての『述義』の意味について論じていたのである。

大東文化学院教授岡村利平(生没年未詳)の場合、『日本之儒教』に寄稿した「弘道館記述義と日本儒教」において、「水戸学を知り日本儒教を扶植する所以の道を知らんとする者は必ず先づ館記述義よりすべきである。(中略)国を憂ふる士は東湖の精神を復活して大義の觀念を喚び覚し皇道を確認し、人人挙つて国家に殉ずる覚悟をしなくてはならぬ」<sup>32)</sup>との見解を示している。

ところで、前述の「皇道儒学」をめぐる安の議論の展開は、「皇道儒学の本義は前に述べたる如く、国体を明にし人道を正しくするにあり、故今日儒道振興を云為するにも、是に支那の誤つた思想を丸呑にし、或は朝鮮末期の弊習を其儘踏襲してはならない」<sup>33)</sup>と主張されているように、従来の朝鮮儒林の「支那儒学の直訳」<sup>34)</sup>の傾向および「朝鮮末葉の弊習」・「過去儒学の末弊」<sup>35)</sup>を払拭するという安自らの「儒道振興」論の地平のうえで行われていたことがわかる。このことは、すでに、「朝鮮に於ける儒道振興の必要」にも表明されていたスタンスである。こうした安の持論は、第六章で考察するように、「東亜の建設と儒道精神」(『経学院雑誌』第45号)にもっとも具体的に表れている<sup>36)</sup>。いずれにせよ、安は、次のような文章をもって「皇道儒学(二)」を終える。

世界万国の中万世一系の皇統を戴き、三千年の輝かしき歴史を有するは、我が日本を置いては更になく、東洋数千年来支那革命の反復なるに拘らず、二千五百年を通じて人類の尊仰をうくるは孔子の如きはなし。是に於て方邦無比の国体に万世人道の大本を取り



入れ、旨く融合醇化、渾然一体となし、国体は愈々尊厳に、人道は益々宣揚せられ、人類歴史上今まででなかつた新しき道德を建設し、之を以て東亜共栄圏の指導原理となし、進んでは世界新秩序の建設にも大に貢献したいのが、これ皇道儒学の究境の目的である<sup>37)</sup>。(傍点は引用者)

一方、上掲の論考を引き継ぐ安の「皇道儒学の本領」(『朝鮮』第347号、1944年4月)は、一年半の時間的隔たりにもかかわらず、「皇道儒学」・「皇道儒学(二)」の内容と殆ど変わりが無い。異なる点は「日本」が「神国日本」に、「新しき道德」が「最高至善の新しき道德」に、「世界新秩序の建設にも大に貢献したいのが、これ皇道儒学の究境の目的である」が「世界新秩序の建設にも大なる貢献を捧げ以て、大同太平の理想世界を東亜の新天地に建設し度いのが、之れ皇道儒学本領の完成と申すべきである」<sup>38)</sup>というようなレトリックが加えられているだけである。すなわち、7頁ほどのこの小論は、二つの先立つ論考を要約、まとめた性格のものであり、そこでのパラグラフの内容が繰り返されるような文章が目立つ。「道義立国の大精神」の顕現としての「教育勅語」論<sup>39)</sup>、孔子の「春秋の尊王大義」<sup>40)</sup>、「固有の皇道精神を明にし儒道の真髄を取入れ」た「最高至善の標準道德」としての「教育勅語」<sup>41)</sup>、「忠孝道義を根本義となしたるもの」としての「孔子の道」<sup>42)</sup>といった内容はほぼ同様のものである。ただし、「皇道儒学(二)」の「今日儒道振興」(『儒道』第2号、41頁)をめぐる言及は、「磐石の如き国体の上に新しき精神文化を建設して興亜聖業に貢献したいのが今日儒道振興の目標である、之が皇道儒学本領の終である」<sup>43)</sup>との表現に置き換えられている。また、1944年の太平洋戦争の新たな戦況展開の中には、「皇道儒学(二)」にある「文教報国の実」(『儒道』第2号、42頁)という表現が加えられ、「共通の信念の下に道義的世界を建設するのが今日の文教報国の使命であらうと存するのである」<sup>44)</sup>となっている。ところで、もっとも注目すべきものは、上述の「皇道儒学(二)」と「皇道儒学の本領」との最後のパラグラフに連続して繰り返された、「万邦無比の国体に万世人道の大本を取り入れ、旨く融合醇化、渾然一体となし」というナラティブである。また、この箇所は、「皇道儒学とは我国固有の皇道精神を基本とし、これに東洋道德の根源たる儒教道德の真髄を融合するを云ふ、(中略)国体と人道とは互に循環作用をなし、相離るべからざる関係を有すると共に、二者完全に融合醇化せられ最高至善の国民道德の規準と成るべきものである」<sup>45)</sup>という、「皇道儒学の本領」冒頭の内容と一貫するものである。

このように、大東文化協会・大東文化学院の設立とともに語られはじめた「皇道に醇化融合したる儒教」というナラティブは、安の論考においても、同様に現れた。安はこうしたナラティブを、経学院および朝鮮儒道連合会の側から再び語り出した、もっとも中心的な人物であったのである。しかのみならず、安は明倫専門学校教授兼朝鮮儒道連合会教育部長として、植民地朝鮮内の「皇道儒学」の確立とその普及のための<実践>活動を全うしようとした中心的な人物であったのである。

## 五、「道は一なり」

1891年生まれの安寅植は1929年3月に大東文化学院高等科を卒業するが、1890年生まれの朱柄乾は二年遅れて1931年3月に高等科を卒業した。両者とも、卒業後には、経学院の明倫専門学校教授を務めることになる。1932年10月13日に明治神宮外苑の日本青年館で開催された、大東文化協会・大東文化学院「創立十周年大会」の記録である『創立十周年記念号大東文化協会 大東文化学院』には、朱の「儒教将焉往乎」(83頁)が載せられている。

朱が『儒道』に発表した論考の中で、もっとも早い時期のものが第3号(1943年1月)の「[[研究] 李栗谷先生<sup>イ・ユルコク</sup>」である。朱は、この連載の論考(「李栗谷先生[其二]」『儒道』第4号、「李栗谷先生[其三]」『儒道』第5号、「栗谷先生」『儒道』第6号)を『儒道』に掲載する趣旨と関連して、「時は大東亜戦争遂行中に当り、朝鮮の先哲にして東洋の哲学・政治・経済の才能を兼有し且実行したる大儒の事績・学説等を一考して時局下に適切なるものを取り、皇道翼賛に資せんに堅忍且つ持久の精神を以てせば敢て他山の石にあらざるべし」<sup>46)</sup>と述べている。この連載の論考とほとんど同時期に、朱が明倫専門学校教授の肩書で『儒道』に発表したのが「漢和 中朝事実」(『儒道』第4号)、「漢和 中朝事実(二)」(『儒道』第5号)、「漢和 中朝事実(其三)」(『儒道』第6号)である。『中朝事実』は、江戸時代前期の儒者・兵学者であった山鹿素行(1622-1685)が1669年に「尊王思想の歴史書」として著したものとして知られている。朱がこのように素行および素行の『中朝事実』に取り組むようになったのは当時の素行言説の膾炙<sup>47)</sup>と関わりがあると考えられる。ことに『中朝事実』に関して言えば、奥村利平が校註した『中朝事実』(明治書院)が1942年に刊行されており、小林一郎講述「皇国精神講座」の第4輯(1942年4月)と第6輯(1942年6月)に「中朝事実(上)」・「中朝事実(下)」が掲載された時期でもあった。朱が「皇道翼賛に資」する作業の一環として、1943年1月より「[[研究] 李栗谷先生」を『儒道』に連載したのと同時期に、彼は「皇国精神講座」の一テキストに採択された『中朝事実』を『儒道』第4号(1943年8月)より「漢和 中朝事実」として連載することになるのである。「漢和中朝事実」の「例言」において、朱は、「山鹿素行先生は無言大将乃木將軍の最も崇敬する所、就中素行先生著『中朝事実』はその最大の愛読者たりき嘗て私費を投じて印行し、世の識者或は図書館、公共団体等への配贈せられた」<sup>48)</sup>と記している。朱がこのように、漢文体の『中朝事実』を『儒道』にて翻訳・紹介しようとした理由は、次の文章から見て取れる。

素行は伊藤仁斎・荻生徂徠と同じく古学一派を開いたが、誰よりも先に朱子学より古学に転向した人である。仁斎も素行と殆ど同時に朱子学から古学へ転じたが、少し後素行は何処までも孔子を尊崇した。併し余程日本の精神が勝つてをつて、国体を闡明し、内外の別を明かにし、而して武士道を發揮するに大に力を用ひ、又兵学の研究に一新紀元を開いた。儒教の謳歌者ではあるが、併し純然たる当時の日本主義者であつた。その精神的薰陶によつて赤穂義士の快挙も起り、吉田松陰及び乃木大将等の壮烈なる事跡も発

生したやうな次第で、素行の影響の如何に偉大にして且つ年を経るに随つて益々熾盛なるかを知るべきである。之れを仁斎・徂徠の学派の今日全く廢れて後継者なきに比べると、非常な相違の有ることは看過するわけに行かない<sup>49)</sup>。(傍点は原文)

すなわち、朱にとって素行とは「国体を闡明し、内外の別を明かにし、而して武士道を發揮するに大に力を用ひ」た「日本主義者」であつたのである。このような素行をめぐる朱の見解と合わせて、漢文体の『中朝事実』を日本語に翻訳した朱の能力は、彼の大東文化学院での学業経験を抜きにしては考えられない。こうした朱の立場は、安寅植とともに経学院儒者の間では例外的なものであつた。一方、もっとも注目すべき朱の発言は、『経学院雑誌』最終号（第48号、1944年4月）に掲載された「儒教の進むべき道」にみられる文章であろう。

夫れ日本儒教は一言にて之れを蔽へば、儒学の本来の精神たる実践躬行に重きを置き、忠孝一本、文武岐ならざるを以て大義名分を明かにするにあるべく思惟さる。特に水戸学とは日本朱子学とも謂ふものにして、時正に徳川幕府朝廷の大政を擅に將軍の手にて行はんとするに当り、其の不義を反省せしむる大義名分に訴ふるに重点を持ちたれば、朱子の通鑑綱目中、正閏論と春秋の大義名分とをも、一層強要せるにあらん其の大要は弘道館記に明記し。藤田東湖の同述義に詳釈せり。記中の大要は、一に敬神、二に愛民、三に尚武にして忠孝一本。文武不岐を、実践躬行にも一層勉励し大義名分に最重点を立て、漢土の因循緩漫たる儒教及び在来の文墨を弄し詩賦を戯れる儒俗の末技を一刀を以て快断して痛斥して、忠孝を実行する以外に道なく、大義名分を主とせざれば教なき一本直進の学なり。之れに依りて前に水戸の烈公、義公の心血の注げる大日本史あり、後に継承せし幾多の忠烈を極める志士義人の大成功たる明治維新の大業を翼賛せるあり。此に至れば日本儒教、水戸学の偉大なること、豈前挙せる俗儒末学を事とする者の夢想にも及ぶべからざる事にあらずや。一体漢土と云ひ、朝鮮と云ひ儒教に於て道は一なり、豈優劣あらんや、然るに日本は其の真髓を得、他は汗漫たるに流る。これ我が輩の注意に猛省を催し繁を捨て、簡を取り、短を去りて長を選ぶべきことにあらずや。我が朝鮮儒教の皇道儒学に則る処は右挙せる大本数句にありて、別に之れを儒教以外より取来たるものにあらず、儒教の真髓、人倫の大綱実此にあり、豈因循躊躇することあらんや<sup>50)</sup>。(傍点は原文)

ここでは、「日本儒教」とは「日本朱子学」の「実践躬行」としてある。「水戸学」として成立した「日本朱子学」とは、「忠孝一本」と「文武不岐」とをその主な内容とする。その「水戸学」とは、「江戸の將軍権力にもっとも近い親藩水戸藩で、しかし幕府権力を構成する官僚たちとは異なる政治的視点と見識をもった水戸藩主徳川齊昭のもとに集う新たな武家

知識層によって構成された歴史主義的な国家経綸の言説」<sup>51)</sup>である。1838年に徳川齊昭の命により水戸藩士藤田東湖が起草した『弘道館記』には、「一に敬神、二に愛民、三に尚武にして忠孝一本」というメッセージが含まれているとされる。これに先立つ『大日本史』という「徳川政権という武家政権下の近世日本にあって水戸藩が企てる天皇と朝廷統治の正統性を通史的に弁証するような歴史編纂の試みは、武家支配下の日本を超えた日本国家への視点をこの修史事業に携わる人びとに与えてい」<sup>52)</sup>ったのである。儒学の「実践躬行」としての「日本儒教、水戸学の偉大なること」もここにある。上記の引用文において、朱は「我が朝鮮儒教の皇道儒学に則る処は右挙せる大本数句にありて、別に之れを儒教以外より取来たるものにあらず」と明確に述べているのである。朱が「一体漢土と云ひ、朝鮮と云ひ儒教に於て道は一なり、豈優劣あらんや」と主張することができたのも、こうした理由による。朱が修学した大東文化学院で成立した「皇道儒教」・「皇道儒学」としての「日本儒教」言説は、「朝鮮儒教」の拠点としての経学院内の明倫専門学校の教授であった朱にとって、「儒教に於て道は一なり」というナラティブでもって植民地朝鮮において正当化されてくるのである。まさに、朝鮮の儒者の側から「皇道儒学」言説を語ることができる根拠もここにあるのである。

## 六、「大同太平の世界」と「興亜聖業の大精神」の合致

今日我々苟も儒教を尊崇する者は、この湯島の聖堂を中心と致しまして、現下の混沌として、その帰趨するところを知らない世界の動乱に対応すべく、且又来るべき世界の新事態に即応すべく万全の策を講じなければならぬ重大時機に際会致してゐるのであります。それには、先づ我々儒教を遵奉するものは、少くとも東洋に於ける諸民族の嚮ふべき精神基準を樹立して、彼等を指導して行かうとする責任感がなければなりません。かくすることが我々の義務であり、東亜共栄圏を建設する国策に協力することであり、進んでは世界平和に貢献することになると信ずるものであります。これには、我々の献身的努力によりまして、今日に至るまで東洋諸国の国民精神に浸透してゐる儒教を以て、東洋諸民族の指導精神とすることが最も普遍妥当性があるものと思ひます。従ひまして、我々は一層団結を固め、不退転の決意を以て儒教を振作することによりまして、世界情勢の変転に対処するの用意がなければなりません<sup>53)</sup>。

この引用文は、朝鮮儒道連合会の日本「聖地参拝」(1941年10月17日～11月4日)<sup>54)</sup>に参加した17名の中堅儒林団員たちが10月25日に東京湯島聖堂を参拝した後、午前11時ごろから行われた東京帝国大学教授であり「斯文会」総務部長でもあった宇野哲人(1875-1974)の講演「日本精神より見たる儒教」の要旨の冒頭部分である。この講演で宇野は、現世界およびアジア情勢の中で、「東洋諸国の国民精神に浸透してゐる儒教を以て、東洋諸民

族の指導精神とす」べきと語っている。だが、ここで宇野の言う「儒教」とは、「日本精神より見たる儒教」である。そうした「儒教」を宇野は「朝鮮にをられる同志諸君」に発しているのである。また、その「日本精神より見たる儒教」とは、「大義名分」としての「国家に対する道徳」<sup>55)</sup>を意味する。これと関連して、宇野はこう説明する。

支那に於きましては、御承知の如く革命が相次ぎ、孔夫子が春秋を編纂された大理想は充分に発揚出来なかつたのであります。独り日本が天孫連綿として皇統をお嗣ぎなり、大義名分も日本国民精神に透徹してをるのであります。水戸学も大義名分を明かにせんが為に発生した学派でありまして、かゝる点から見ましても、儒教は日本に入つて始めて真の精神を発揮することが出来たものと確信し得るのであります<sup>56)</sup>。

宇野は、ここにみられる日本の＜儒教の真の精神の發揮＞が、明治維新以後の「明治大帝」によって「渙発あらせられた」「教育に関する勅語」として顕現したという。「この勅語によつて国民は嚮ふべき方途が昭かに示された」だけでなく、この「勅語」は「全部が儒教精神と合致する」と述べるのである。宇野はこうした「儒教思想をよく究めまして、日本本来の思想を啓蒙することが肝要である」ことを、「朝鮮にをられる同志諸君」の前で強調したのであった<sup>57)</sup>。

ところで、上掲の宇野のいう「東洋諸国の国民精神に浸透してゐる儒教を以て、東洋諸民族の指導精神とする」という論理は、安のような同時代の植民地朝鮮の儒者にも共有された認識であった。そうした認識を構成する言語が、内地日本の言説を再び語り出したとしても、それは単に「同意」や受容の産物にすぎないということを意味しない。安は、朝鮮儒道連合会発足後の1939年12月1日に挙行された「忠清南道儒道連合会結成式」にて、「東亜の建設と儒道の精神」という演説を行う。分量において「皇道儒学」と「皇道儒学（二）」を合わせたものとはほぼ同じ長さの演説であった。朝鮮儒道連合会発足後の郷里の忠清南道における儒道連合会の結成に際し、経学院司成として自らの持論を公にしようとする意志が、この演説には表れているのである。安はそこで、こう述べている。

日本帝国ハ道義立国シタル最初ノ理想ガ他ノ権力国家ト特異ナルハ勿論ニシテ、八紘一宇ノ大精神ノ下ニ君民一体トナル。上ニハ万世一系、万邦無類ノ尊嚴ナル国体ヲ奉戴シ下ニハ億兆一心、忠孝道義ヲシテ結晶セラレタル特殊ノ国民性ヲ發揮シ建国二千六百年ノ光輝アル歴史ハ世界的指導国家トシテノ資格ガ充分デアリ、(後略)<sup>58)</sup>。

東洋固有ノ精神文化ノ新運動ヲ起シ、国民ヲシテ忠孝道義ノ信念ヲ涵養セシメ、以テ道義ニ生キ道義ニ死ストノ覚悟ヲ堅クセシメ、尚進ンデハ此ノ信念ヲ広推シ、満支諸民族ニ対スル共通の信念ヲ發揮シテ、民族ト国境トヲ超越シ、利害ト感情トヲ脱離シテ、大



同太平ノ理想世界ニ携手同帰スル大覚悟大決心ヲ喚起スルノガモットモ必要ナノデア  
ル<sup>59)</sup>。

「道義立国」として「日本帝国」を捉えることは、この演説を引き継ぐ「皇道儒学」およ  
び「皇道儒学の本領」にも表れている。すなわち、「日本帝国」とは、「道義立国」としての  
「道義の帝国」ということである。安は、この「道義の帝国」における国民として、「道義  
ニ生キ道義ニ死ス」という「忠孝道義」を強調している。この「忠孝道義」とは「東洋固有  
ノ精神文化ノ」の所産であるが、安は、「日本国民」として「東洋固有」の「共通的信念ヲ  
發揮シテ」「満支諸民族」と関わる「利害ト感情トヲ脱離シテ、大同太平ノ理想世界」をと  
もに建設していくべきことを、忠清南道儒道連合会会員の前で語ったのである。その「大同  
太平ノ理想世界」とは、例えば、このようなものであった。

又此ノ精神ヲ以テ、東亜ノ永久平和ヲ確立シ、日満支諸民族ノ共同有機体ヲ組成シテ、  
天下一家ト四海同胞ノ理想ノ下ニ、国境ト民族ノ偏狭主義ヲ撤廃シ、利害ト感情ノ諸般  
ノ衝突ヲ解消シ、道德礼儀ヲ以テ一鎔ニ陶冶シテ兄弟ト相視、彼我相忘レ、平和ノ樂土  
ト地上ノ天国ヲ東亜ノ新天地ニ建設セシメ、真ニ孔夫子ノ理想タリシ大同太平ノ世界ヲ  
完全ニ実現スルコトヲ期待シ止マザル所デアル。コレガ八紘一宇ノ大精神ヲ奉体スル所  
以デアリコレガ帝国特有ノ皇道ノ大精神ヲ世界ニ宣揚スル所以デアル<sup>60)</sup>。

安がここでいう「日満支諸民族ノ共同有機体の組成」とは、「東亜ノ新天地」、すなわち  
「東亜新秩序建設」の意味と相通ずる。これは、「孔夫子ノ理想タリシ大同太平ノ世界」実現  
と同様の意味とされるのである。すなわち安は、経学院司成として、この演説で「今日東亜  
新秩序建設ハ儒道振興上千載一時ノ好機ナレバ、我々ハ過去ノ弊習ニ対シテハ斷乎タル革新  
ヲ加ヘ、儒道ノ真精神真面目ヲ完全ニ發揮スベキデアル」<sup>61)</sup>と力説しているのである。

## 七、解放後・戦後における「皇道儒学」のゆくえ——むすびに代えて

安は、韓国の解放後の1949年5月26日、「反民族行為処罰法」によって「反民被告」と  
して逮捕され、裁判にかけられた。「皇道儒学とは何ですか」という沈相駿<sup>シム・サンジュン</sup>検察官の尋問に  
対して、安は「日本人がつくった用語であり、その語の真意についてはよくわかりません」<sup>62)</sup>  
と答えるだけであった。こうした安の答弁が示すように、「皇道及国体に醇化せる儒教」と  
しての「皇道儒教（学）」というナラティブとその言説的営みは、帝国日本の敗北ととも  
に、日韓両国においてその終末を迎えることとなったのである。しかしながら、支配規律の  
ための機制としての「道義」言説は、決して日韓両国でその生命力を失うことはなかった。  
一例として、安が1965年12月に発表した「忠南儒教」には、そうしたことが見て取れる。  
その論考で安は、朴正熙<sup>パク・チョンヒ</sup> (1917-1979)「革命政府」の「国民再建運動」による「人間改造」

の努力を高く評価している。その「人間改造」のための「国民再建運動」上における「儒教精神」の有効性が再び強調されているのである。すなわち、「人道の大本」としての「儒教精神」とは、「国民精神の涵養」・「道義昂揚運動」を通しての「人間改造」に帰結する。かつて経学院内の言論形成を先導したのと同様に、安はこの時期に改めて「儒林の同志に敬告」したのであった<sup>63)</sup>。安はまた、こういう。

我が儒林の同志に敬告する。我々が今日もっとも儒教の否運時期に際し、孔夫子の至誠救世の大精神を体得して、道義を昂揚し彝倫を扶植して徹底的な至聖救教の運動を展開することによって新建国家の風教を裨補し世界人類の平和に貢献することになるように至誠懇願するところである<sup>64)</sup>。(原文は韓国語文)

この引用文は、第六章で取り上げた、安の「東亜ノ建設ト儒道ノ精神」における文章を想起させる。「道義」を鑄造する主体が、単に「帝国日本」から「革命政府」の「新建国家」に代わったのみである。「新建国家」における「風教を裨補」するという、この「国家意識」と権力的なナラティブは、かつて帝国日本・朝鮮総督府支配下の経学院儒者たちの「皇道儒学(教)」言説を再び語る者の知的な営みが如何なるものであったのかを明確に示唆しているのである。

このように、今日の韓国では、「皇道儒学」研究の学問的実践性とは、過去からの脱却もしくは「過去史の未精算」問題と不可分である。またそれは、解放後の韓国および北朝鮮において語り継がれてきた「皇道儒学(教)」の言説的営みとともにある、支配規律の機制としての「道義」の語り手と既存支配勢力とともに、将来の韓国社会のあり方に関わる問題でもある。

一方、大東文化学院の設置認可(1923年9月20日)以前の、同年2月11日の大東文化協会の設立に関わった東洋文化学会(1921年5月設立)は、1943年、平沼騏一郎が1915年4月に創立し、1925年2月に設立した「無窮会」へ「吸収合併され」<sup>65)</sup>て現在に至っている。もともと東洋文化学会は、「帝国の天職と世運の趨勢とに鑑み、我が国体民生の精華を發揮し、外来各種の思想を融化し、政教風俗の中和醇厚を期待するが為に、古来吾が邦先覚の洗鍊を経て、皇道の輔翼たる儒学を振興して、之を現代に活用し、併せて東洋文化の本質を闡明鼓吹することを以て目的とす」<sup>66)</sup>(傍点は引用者)る団体であった。ところで、この無窮会は、「我が国体民生の精華を發揮するため、皇道儒学の本質を闡明するを目的」<sup>67)</sup>(傍点は引用者)として、1939年2月に財団法人として新たに出発した。管見の限り、植民地朝鮮を除き、日本においてこの語が登場した事例はこれが唯一のものである。これは「皇道儒学の確立」を目的とした1939年10月16日の朝鮮儒道連合会の結成、そして1941年3月の朝鮮総督府による「皇道儒学」という用語の公式化とほぼ同時期にあたる。だが、より本質的なことは、1961年12月刊行の『東洋文化』復刊第1号に掲載されている「復刊の

辞」の中にある「本誌創刊以来一貫不変の大目的は、瞭然として明らかである。敗戦を境として一変した世態も、何等この大目的を動揺させるものでない」<sup>68)</sup>という発言が示しているであろう。ここには、無窮会の「戦後」に繋がる「皇道儒学」言説の思想的営みの連続性が見出されるのである。

## 註

- 1) 朝鮮王朝時代の最高教育機関であった成均館は、植民地期の 1911 年に経学院と名称を変え、財政的な側面を含め、朝鮮総督府の監督する朝鮮儒者の機関となった。
- 2) 明倫学院は朝鮮総督府令 13 号に基づき、1930 年 2 月 26 日に設立された。1933 年 2 月 16 日に 2 年制から 3 年制に改定・変更された。その後、1939 年 2 月 18 日に明倫専門学院に改称、改変される。朝鮮総督府令第 13 号の明倫専門学院の規定第 1 条には、「明倫専門学院ハ皇国精神ニ基キ儒学ヲ研鑽シテ国民道德ノ本義ヲ闡明シ忠良ナル皇国臣民ヲ養成スルコトヲ以テ目的トス」(『朝鮮総督府官報』第 3623 号、1939 年 2 月 18 日)と明記されている。明倫専門学院は、以後の 1942 年 3 月 17 日に明倫専門学校に昇格されるが、1944 年 10 月 14 日には朝鮮明倫錬成所に改組された。
- 3) 明倫学院講師を経て明倫専門学校教授兼経学院司成となる安寅植は、1925 年 4 月に大東文化学院高等科に入学し、1929 年 3 月 25 日に同学院同科を卒業(第 3 期卒業生 21 名の一人)する。また、安と同様に明倫専門学校教授となる朱柄乾は、安と同じく朝鮮京城普通学校付設の臨時教員養成所の出身であり、大東文化学院本科を経て 1931 年 3 月に大東文化学院高等科の第 5 期(24 人の一人)卒業生となる。大東文化学院編『大東文化学院要覧』、1933 年、126-138 頁。
- 4) 戸水寛人『国政論集』、非売品、1924 年、77 頁。また、『木下成太郎先生伝』、木下成太郎先生伝刊行会、1967 年を参照。
- 5) 『大東文化学院要覧』、7 頁。
- 6) 『江木千之翁経歴談』下巻、江木千之翁経歴談刊行会、1933 年、143 頁。江木は、また、「振古未曾有の世界大戦に依つて、欧羅巴では数百年の星霧を費して築上げられたる文明は、一朝にして土崩瓦解し、随つて思想界に大混乱を來たし、我国も亦其の余波を受くることになつて、洵に寒心の堪へざるものがあるので、朝野の識者は大に之を憂へて、我国固有文化の維持振作、国体の闡明に一層力を効すことを緊切なりと考へ、其の一端としては、支那に興り我国にて醇化したる儒教の衰退を防ぎ、更に進んで之を振興することを必要なりとし、(後略)」(『江木千之翁経歴談 下巻』、141 頁)と述べている。
- 7) 伊藤隆『昭和初期政治史研究—ロンドン海軍軍縮問題をめぐる諸政治集団の対抗と提携—』、東京大学出版会、1969 年、396 頁。
- 8) 『大東文化学院要覧』、12 頁。
- 9) 『創立十周年記念 大東文化協会 大東文化学院創立沿革』、大東文化協会・大東文化学院、1932 年、8-9 頁。
- 10) 『日本之儒教』、日本儒教宣揚会、1934 年 6 月、269 頁。「日本儒教宣揚会」の創立趣旨については、加藤政之助「日本宣揚会創立の趣旨」『日本之儒教』、177-185 頁を参照。
- 11) 『日本之儒教』、8-9 頁。
- 12) 『日本之儒教』第 2 輯、日本儒教宣揚会、1936 年 1 月、282 頁。安はまた、1935 年春に催された斯文会の「儒道大会」に参加し、「日本素称東方君子国。万世一系。国体壯嚴。固有之皇道。

- 与儒教醇化。為道德之源泉」(「儒教為東洋大宗教布告文」『湯島聖堂復興記念 儒道大会誌』、斯文会、392 頁)と述べている。
- 13) 「祭文」『日本之儒教』、4 頁。
  - 14) 『日本之儒教』、46-47 頁。
  - 15) 『日本之儒教』、147-148 頁。
  - 16) 『日本之儒教』、127 頁。
  - 17) 『日本之儒教』、124-125 頁。
  - 18) 「日本精神の作興」『日本之儒教』第 2 輯、82 頁。
  - 19) これに関しては、エドワード・W. サイド『始まりの現象一意図と方法一』山形和美・小林昌夫訳、法政大学出版局、1992 年を参照。
  - 20) 『朝鮮社会教育要覧』、朝鮮総督府学務局社会教育課、1941 年 10 月。『日本植民地教育政策史料集成 (朝鮮篇)』第 51 卷 (下)、龍溪書舎、1989 年、77 頁。
  - 21) 『朝鮮社会教育要覧』、69 頁。
  - 22) 「皇道儒学」『儒道』第 1 号、31-32 頁。
  - 23) 「皇道儒学」、32-35 頁。また、安寅植の大東文化学院卒業後、学習院中等科教授であり大東文化学院に出講していた飯島忠夫(1875-1954)は、「大日本史の完成と後期の水戸学の成立」について、以下のように述べている。「従前の儒者が堯舜禹湯文武の道とか先王の道とか称したのに代へて後期の水戸学では神皇の道と称し、又之を略して皇道とも称した。これによつて儒教思想の粹は尽く皇道の中に収められたのである。光圀の時代から始められた水戸の大日本史はこの後期に於て完成した。この大日本史の完成と後期の水戸学の成立とは、実に徳川幕府の初から諸学派が互に論駁して変遷して行く間に鍛錬した結果が現れたので、国史が如何に儒教的に開拓せられたか、儒教が如何に日本的のものに造り上げられたかを見るべき大なる傑作と言ふことが出来る」(「日本儒教」『日本精神』、理想社出版部、1940 年、165 頁)と。さらに飯島は、「皇道の中には儒教が充分に渾融せられて居る。儒教は皇道に醇化したのである。孔夫子の論語は皇道の最良注釈書であるといふことを、教育勅語の起草に参加した元田永孚翁は述べて居る」(「湯島聖堂の復興を賀す」『斯文』第 17 編第 5 号、1935 年 5 月、24 頁)との見解も述べている。
  - 24) 「皇道儒学 (二)」『儒道』第 2 号、35-38 頁。
  - 25) 「皇道儒学 (二)」、38 頁。
  - 26) 「皇道儒学 (二)」、41 頁。
  - 27) その他、『詔勅衍義』、『直毘靈』、『神皇正統記』、『新論』も学習対象であった。斯文会編『斯文六十年史』(斯文会、1929 年、430 頁)および、浅沼薫奈「井上哲次郎と大東文化学院紛擾一漢学者養成機関における「皇学」論をめぐって一」『東京大学史紀要』第 27 号 (2009 年 3 月、36-38 頁)を参照。
  - 28) 加藤は、大東文化学院教授を経て、『弘道館記述義小解』公刊当時は東洋大学教授、宮内省御用掛、国民文化精神研究所研究嘱託であった。晩年には無窮会の理事長・研究所長を務めた。
  - 29) 加藤虎之亮『弘道館記述義小解』、文明社、1944 年 (初版は 1928 年)、「再版自序」3 頁。
  - 30) 「序」『弘道館記述義小解』、1-2 頁。
  - 31) 『弘道館記述義小解』、30 頁。『弘道館記述義小解』についての詳細な考察は別稿に譲る。
  - 32) 『日本之儒教』、78-79 頁。
  - 33) 「皇道儒学 (二)」、41 頁。
  - 34) 『朝鮮社会教育要覧』、68 頁。

- 35) 安寅植「経学の利用と儒林の覚醒」『春秋』第2巻第3号、1941年4月、151頁（もと漢字交じり韓国語文）。
- 36) 『朝鮮社会教育要覧』、68頁。朴澤相駿「会長式辞」『儒道』第1号、1942年4月、53-54頁。
- 37) 「皇道儒学（二）」、43頁。
- 38) 「皇道儒学の本領」、『朝鮮』第347号、朝鮮総督府、1944年4月、32頁。
- 39) 「皇道儒学の本領」、27頁。
- 40) 「皇道儒学の本領」、29頁。
- 41) 「皇道儒学の本領」、31頁。
- 42) 「皇道儒学の本領」、32頁。
- 43) 「皇道儒学の本領」、30頁。
- 44) 「皇道儒学の本領」、30頁。
- 45) 「皇道儒学の本領」、26頁。
- 46) 「[研究] 李栗谷先生」『儒道』第3号、84頁。
- 47) 『山鹿素行全集』（帝国報徳会出版部）は、1917年にすでに刊行されており、「国民精神文化文献」第8号として、1936年よりは『山鹿素行集』（国民精神文化研究所）が刊行されはじめた。
- 48) 「漢和 中朝事実」『儒道』第4号、49頁。
- 49) 「漢和 中朝事実」、51頁。
- 50) 「儒教の進むべき道」『経学院雑誌』第48号、1944年4月、39頁。
- 51) 子安宣邦『「維新」的近代の幻想—日本近代150年の歴史を読み直す—』、2020年、109頁。
- 52) 『「維新」的近代の幻想—日本近代150年の歴史を読み直す—』、97頁。
- 53) 『朝鮮儒林聖地巡拝記』、朝鮮儒道連合会、1943年、77-78頁。
- 54) この「聖地参拝」は、団長を務めた当時朝鮮総督府事務官兼朝鮮儒道連合会文化部長の永田種秀（金秉旭 [1895-?] が創氏改名したもの）が明らかにしているように、「聖地参拝の傍ら、内地の皇道儒学の真髄を研究して、朝鮮内における皇道儒学の確立に役立たせる」（『朝鮮儒林聖地巡拝記』、71頁）ことを目的に行われた。
- 55) 『朝鮮儒林聖地巡拝記』、81頁。
- 56) 『朝鮮儒林聖地巡拝記』、78頁。
- 57) 『朝鮮儒林聖地巡拝記』、83-84頁。
- 58) 「東亜ノ建設ト儒道ノ精神」『経学院雑誌』第45号、1940年12月、77-78頁。
- 59) 「東亜ノ建設ト儒道ノ精神」、82頁。
- 60) 「東亜ノ建設ト儒道ノ精神」、91頁。
- 61) 「東亜ノ建設ト儒道ノ精神」、91頁。
- 62) 「反民被告文龜祐・安寅植に対する第1回公判開廷」『聯合新聞』、1949年5月26日付（『資料大韓民国史』第12巻）。
- 63) 「忠南儒教」『忠清南道誌』下巻、1965年12月。引用は、岬山先生記念事業会『岬山文稿』、文潮社、1973年、233頁。
- 64) 「忠南儒教」、275頁。
- 65) 浅沼薫奈「大東文化学院創設者たちの教育思想—平沼騏一郎・小川平吉・木下成太郎の相互関係から—」『人文科学』第17号、大東文化大学、2012年3月、103頁。
- 66) 「東洋文化学会々規」『東洋文化』第1号、東洋文化学会、1924年1月。
- 67) 『日本文化団体年鑑』、1943年。『戦時下日本文化団体事典』第3巻、1990年、351頁。



68) 「復刊の辞」『東洋文化』復刊第1号〔通巻第23号〕、財団法人無窮会、1961年12月、4頁。